

談話における現代中国語の人称代名詞「人家」に関する研究

任, 暁雪

<https://doi.org/10.15017/4060253>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (学術), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

要 旨

現代中国語における人称代名詞としての“人家”には、旁称用法、3人称用法、1人称用法があると言われるが、このような“人家”の諸用法と、同じく「旁称」と呼ばれる人称代名詞“別人”、3人称代名詞“他”、1人称代名詞“我”との類似点と相違点についての詳細な研究はほとんどない。また、“人家”には他の人称代名詞には見られない感情表出機能があると言われるが、その機能の緻密な分析もほとんどない。さらに、このような“人家”の特徴を統一的な観点から研究したものは皆無である。本研究は、そのような先行研究の問題点を解決すべく、東郷（2000）の提唱する「談話モデル理論」を基に、人称代名詞として用いられる“人家”の諸用法を統一的に説明し、他の人称代名詞との相違を解明することを主たる目的としたもので、以下の構成からなる。

第1章は「序論」で、本研究の背景、目的、方法および本研究で用いる表記法について述べた。第2章は「先行研究概観」で、“人家”の通時的観点からの先行研究、現代中国語における人称代名詞“人家”に関する先行研究を概観した上で、従来の研究の問題点を指摘し、本研究の課題を提示した。第3章では、現代中国語における人称代名詞“人家”の観察を行った。まず、人称代名詞“人家”の諸用法を確認し、観察のための方法、資料体について述べた。次に、東郷（1999）の直接指示と間接指示の観点から、“人家”の各用法と典型的人称代名詞の類似点と相違点を観察した。また、これまで指摘されることがなかった“人家”の用法を指摘し、それを“人家”の「関連対象喚起」用法と名付けた上でその特徴を明らかにした。第4章では、“人家”を扱うには談話レベルの考察が必要なことを指摘した上で、本研究が用いた理論的枠組み、東郷（2000）の「談話モデル理論」およびその基本的な用語・概念について説明した。第5章では、この理論的枠組みに従い、人称代名詞“人家”の諸用法を統一的に説明すると同時に、第3章での観察結果に基づき、“人家”の各用法の実態および諸用法に対応する典型的人称代名詞との類似点と相違点を分析した。第6章では、人称代名詞“人家”とそれに対応する日本語の形式の対照を扱った。まず、本研究が資料体として用いた『中日対訳コーパス』に出現した“人家”に対応した日本語の形式を整理し、“人家”に対応する頻度をもっとも高かった日本語の「ひと」と人称代名詞“人家”との機能的類似点と相違点を明らかにした。そして、終章の第7章では、本研究の結論として第2章で提示した本研究の課題に対する回答を示し、最後に今後の課題を述べた。

以上の結果、本研究は、現代中国語の人称代名詞の“人家”は間接指示表示専用の形式であること、また、その指示にあたって東郷の「談話モデル」の「共有知識領域」を必ず経由するという点において3人称代名詞“他”、1人称代名詞“我”と異なること、さらに、そのメトニミー機能に由来する「関連対象喚起」という特別な用法を持つ点において旁称の“別人”とも異なることを明らかにした。これらはいずれも先行研究では指摘されることのなかったものであり、今後当該分野の発展に貢献することと思われる。